

昔話絵本の再話と描画に関する比較研究
— 「かちかちやま」の場合 —

小 山 祥 子

A Comparative Study on the Text and Illustration of Picture book
“Kachi-Kachi-Yama”

Shoko KOYAMA

駒沢女子短期大学「研究紀要」

第 48 号 抜 刷

平 成 27 年 3 月 発 行

昔話絵本の再話と描画に関する比較研究

—「かちかちやま」の場合—

小山祥子

A Comparative Study on the Text and Illustration of Picture book

“Kachi-Kachi-Yama”

Shoko KOYAMA

保育の現場では、昔話を子どもたちに語る際、素話ではなく絵本を使用することが多くなった。この現状を踏まえ、本稿では、昔話が絵本化されてきた経緯と本質に触れた上で、現在出版されている昔話絵本「かちかちやま」を例に、その再話と描画の表現の相違について比較検討した。

結果、昔話絵本は、口承とは異なり、かかれている文章や画によって受け手のイメージは同一化される一方で、使用される言葉は、現代生活では見聞きすることがなくなった表現が多くあるため、子どもに対して視覚的に伝承していく効果があることがわかった。また、昔話絵本には固有のあらわし方があり、それぞれの絵本を特徴づけ、作り手の意図も細部に窺えた。保育者は昔話絵本の選択者として、また昔話の口承者として、文化を伝達していく役割はより重要であるといえる。

キーワード：保育者 昔話絵本 再話 描画 かちかちやま

はじめに

近年、保育現場では昔話を口承文芸として語り伝える保育者が少なくなっている。素話の行為自体も減少傾向にあり、保育者たちは素話の良さを認めつつも、それを身につける時間的余裕もなく絵本や紙芝居に頼っている現状が明らかになっている¹⁾。「幼少期に昔話を聞いて育った」という人は、今後ますます少なくなっていくことが予想される。

一方、子どもたちは、昔話に全く触れていないわけではない。伝達手段が多様化し、変化したのである。保育現場や家庭において、昔話を語る際に、多用されている手段は、絵本や紙芝居、またDVDやTVなどの映像である²⁾。今や口承文芸に代わる視聴覚教材として、これらの存在は大きい。

昔話絵本による読み聞かせは、素話のように柔軟な話の展開は難しく、印刷された文字や絵によって伝達される内容は固定化される。絵による視覚的なメッセージが前面に出るためである。絵本を観る側からすれば、

耳や目から入った情報をそのままに受容するので、描かれる話の世界は同一イメージとなる³⁾。

そこで大切となるのが、読み聞かせる側が、いかに対象者にふさわしい絵本を選ぶかということである。特に、保育現場においては、子どもたちは保育者が選択した絵本を見せられる場合が多い⁴⁾。対象者が幼ければ幼いほど、保育者の絵本の選択力が求められる。

本研究では、昔話絵本が数多く刊行されている現状に鑑み、日本五大昔噺の一つであり、内容について様々な分析研究がなされている「かちかちやま」を通して、昔話絵本とは何かを比較検討してみる^{注1)}。元来の口承昔話が絵本になることにより、いかなる多様な表現が絵本にあるのか、日本における昔話絵本の歴史的経緯を確認すると同時に、「かちかちやま」の昔話絵本10冊を取り上げる^{注2)}。特に、再話の内容と描画の表現に着目し、何が語られ何が語られていないのか、何が描かれ何が描かれていないのか等、各絵本の特徴を客観的、具体的に明らかにしていく。

1. 昔話と昔話絵本の本質

昔話とは、民間説話ともいわれ、古くから民衆の間で口伝えされてきた物語である。語り手と聞き手が、日常の中で何世代も繰り返して語り継いできたものである。独特な語り口調も特徴で、「むかしむかし…」の発端句で始まり、終わりも各地方によって特徴的言葉を使った結末句で終わる⁵⁾。始まりと終わりを知らせるこれらの言葉は、聞き手に昔話と現実の世界を区別させ、普段の会話とはっきり区別させる役割をもっている。語られる時代や場所もあいまいで、不特定な時間と不特定な場所で話が展開していく。登場人物についても、年齢、容姿、性格などはっきり語られない⁶⁾。欧州の昔話研究者であるマックス・リュウティによれば、本来の昔話は、筋・人物・事物がはっきりしており、心中や外見の様子など詳しく説明していない。シンプルかつ明瞭であり、不必要にいろいろな場面を付け加えたり、話を複雑にしたりしてはならないと述べている⁷⁾。日本の昔話研究者である小澤俊夫も、この考えは日本にも当てはまるとしたうえで、昔話を現代共通語に再話したり、絵本にしたりする場合、まずその本質を知っていなければならないと述べている⁸⁾。

一方、絵本とは、「絵」と「詞」の異なる二つの要素が互いに調和し結合した「本」という形態をもつ表現メディアである⁹⁾。米国の絵本研究者バーバラは、「絵本はテキストであり、イラストレーションであり、トータルデザインである。社会や文化や歴史のドキュメントである。そして、まずなによりも、子どもにとって一つの体験をもたらすものである。芸術形式としては、絵と言葉が互いに補完し合っていること、向かい合った二つのページが同時に提示されること、そしてページをめくることによってドラマが生み出されることが、絵本の構造を決定づけている」¹⁰⁾と定義づける。

そこで、これら昔話と絵本を融合させた「昔話絵本」の本質をみていく。双方の本質を兼ね備えたものであることは間違いない。関敬吾説を引用すれば、「昔話の語り方は、『むかしむかしある所に』で始まり、最後は昔話そのものの終了、主人公の幸福、悪人の懲罰を意味することばで終わる。更に一定の繰り返し、三の数および三段階の展開、事件の高揚などの、叙事の法則がある。」¹¹⁾としている。

2. 日本昔話「かちかちやま」

室町末期に成立したといわれている日本昔話である。青森県から鹿児島県までその分布も広いとみられている

る¹²⁾。仇討の場面について、特徴づけられる昔話でもある。「かちかちやま」は、前半と後半に分類され、もともと異なる話が、あるときに結び付いたという解釈もなされている¹³⁾。一般的に知られている話の概要は次の通りである。

前半は、畑を荒らす狸に業を煮やしたお爺さんが、狸を捕まえて家に持ち帰り、たぬき汁にして食べようとす。狸は何とか食べられないようにとお婆さんを騙し、縄をとかせると、杵でお婆あさんを打ち殺し、婆あ汁にしてしまう。そんなこともつゆ知らず、帰宅したお爺さんは、お婆さんに化けた狸から婆あ汁を食べさせられてしまう。すっかり食べ終わったお爺さんに、狸は真実を知らせると、嘲笑い逃げていく。

後半は、お婆さんを亡くしたお爺さんに代わって、兎が狸に敵を討つ話へと展開する。最初は、かや山の兎として狸と一緒にかやを刈り、背負って下山する際に、かやに火を放ち、やけどを負わせる。次に、たで山の兎となって、狸の火傷の痕にとうがらし味噌を薬と偽って塗り込み、さらなる打撃を与える。最後には、松山の兎が作ったどろ舟に狸が乗り、漕ぎ出したあと、舟が壊れ、狸は遂に海の中へ沈んでいく。

以上の内容を確認したうえで、「かちかちやま」が口承文芸から絵本になっていく過程を次に整理する。

3. 「かちかちやま」の絵本化への経緯

江戸期に出されていた草双紙の赤本を引き継ぎ、昔話を主体とした子ども向けの絵本としての「赤本」が始まりといわれている。これは、昔話に挿絵を施した本で、日本五大昔話「桃太郎」「かちかち山」「猿蟹合戦」「舌切雀」「花咲爺」を中心に発行されていた。その後、1879年、坂田善吉が出版した中本型絵本「かちかち山仇討」が登場する。鳥越（2001）による、赤本と中本型絵本の挿絵の比較によれば、絵本の様式が変化しても同様の形・構図で描かれ、最後の場面の舟の形や、兎と狸の擬人化の仕方は踏襲されていると解説している¹⁴⁾。

和紙の加工技術と印刷技術が発展すると、ちりめん本が出回り、開国後に入国する宣教師等の外国人向けに「ちりめん本日本昔噺」が出版されていった。これらの昔話絵本は、絵の美しさと再話の翻訳の良さが高く評価され、日本の文化理解に役立ったともいわれている。

Japanese Fairy Tale Seriesとして20冊が箱にセットされて販売されていた。縦15.5×横10.5センチの小型本で、英字横書きのため、表紙左綴じの和装本である¹⁵⁾。

その中のNo.5、日本語書名「勝々山」は、“KACHI-KACHI MOUNTAIN”として、訳者David Thompson、画家小林永曜（推定）により1885年ころに出版されている。鳥越によるこの本の解説を次に引用する¹⁶⁾。

—この物語は、たぬきが、お婆さんがお爺さんのために持ってきた弁当を盗むことから始まる。たぬきがお婆さんを殺し、「婆あ汁」を食べたお爺さんに“You wife-eating old man you! Did not you see the bones under the floor?”とののしって逃げる場面は、現代では「残酷」と受け取られがちである。しかし、グリムの昔話、ペロウの昔話を持つ西洋では残酷な昔話とは受け取られなかったのではないか。翻訳にあたった宣教師タムソンは、長い滞日経験とキリスト教伝道対象の日本人が親しんでいる昔話から、あだ討ち、弱いものいじめへの抵抗、恩返しなどの日本人の精神的背景を興味深くとらえ、翻訳に生かしたのではないか。見開きで描かれたかちかち山でたぬきの背中の柴から煙が立ち昇る場面、泥舟のたぬきが木の舟のうさぎの櫂に打たれて海に沈む場面は絵になるところである。各場面の背景や小道具の類も丁寧に描かれていて読者に絵を読む楽しみを与えている。—

その後、1886年に堤吉長三郎が「かちかち山」を発行、1900年代に入ると、多色刷り印刷が普及し、絵本の出版が急激に増えていった。これと前後して各地で始まった保育・幼児教育の場では、1876年東京女子高等師範学校附属幼稚園の開設を機に、絵本が積極的に使用されるようになっていく¹⁷⁾。

1917年に武者小路実篤が再話した戯曲の中では、冒頭、兎とお爺さん、お婆さんの関係について、次のような表現がある¹⁸⁾。

—婆「本当にあの兎はいつもかはらず親切なものだ。それもお爺さんが、あれが川におちたのを助けてやったことがあるからその恩を今だに覚えてゐるのだらうが、恩を覚えてゐるのは感心な話ぢやないかね。」—

これによれば、すでに前半の話の中に兎が登場し、お爺さんに恩を感じていた兎が、後半に、兎はお爺さんに代わって、狸への仇討を果たしていることがわかる。

以上のように、昔話「かちかちやま」は、その時々社会情勢の影響を受けながら、時代を経て語り継がれ、挿絵を入れた絵本、つまり昔話絵本「かちかちやま」が自然の流れの中で誕生していったことがわかる。

4. 昔話絵本「かちかちやま」10冊の比較

ここでは、「日本一の画噺」シリーズの「カチカチヤマ」（大正4年 中西屋書店）をはじめ、現在、書店で手に入る各社の昔話絵本「かちかちやま」を取り上げ、再話の内容と描画の表現について比較検討する。表1が、その一覧である。比較する内容は、先に述べてきた昔話の本質に鑑み検討し、次の観点から取り上げる。

- ・絵本の形態・構成の特徴（頁数・文字数・文体等）
- ・昔話の特徴（発端句、繰り返しのリズム、結末句）
- ・再話の内容（場面別の文章表現）
- ・描画表現（日本の原風景・農家や物の描かれ方・登場人物の登場回数や描かれ方等）

(1) 絵本の形態・構成の特徴

結果は、表2のようである。和文で表記されているため縦書きのものが多く、10冊中8冊は、右から左へ、上から下へと流れるように読み進める形態で、右綴じとなっている。本文の頁数は、少なくとも20頁から44頁と絵本によってまちまちである。当然、文字数も異なる。同じ「かちかちやま」でも、556文字で表現しているものもあれば、一番多いものは、2614文字で表現されている。1頁当たりの文字数では、16文字から114文字と大きな開きがみられる。紙面の大きさも異なるが、そのことも含めて1頁に表現する文字と絵の関係にそれぞれ意味を含んでいるものと考えられる。読み聞かせる対象者や場所等によって、選択肢が多くあるともいえる。また、10冊中3冊の絵本の巻末に解説がついていた。「かちかちやま」についての解説であるが、現代生活と異なる場面や物を多く含む昔話絵本にとっては、読み手のことも含めて、内容を理解する上で大変役に立つ重要な部分となっている。文章表現はその多くが現代口語に近く、方言が使用されているのは、わずか2冊にすぎなかった。

表1 昔話絵本「かちかちやま」の概要（発行年順）

| 絵本 No. | タイトル | 初版発行年月日 | 出版社名 | 再話者名(文) (生年・出身地) | 描画者名(絵) (生年・出身地) |
|-----------|--|-------------|----------|-------------------------|-------------------------|
| ① | 日本一ノ画噺 かちかちやま | 1915年9月25日 | 中西屋書店 | 巖谷小波 (1870-1933・東京都) | 岡野榮・小林鐘吉・ 杉浦非水 |
| ② | 新・講談社の絵本 かちかち山 ISBN 4-06-148254-8(児1) | 2001年5月20日 | (株)講談社 | 千葉幹夫 (1944年・宮城県) | 尾竹國観 (1880-1945・新潟県) |
| ③ | 日本傑作絵本シリーズ かちかちやま ISBN 4-8340-0769-3 | 1988年4月20日 | (株)福音館書店 | 小澤俊夫 (1930年・中国東北部) | 赤羽末吉 (1910-1990・東京都) |
| ④ | てのひらむかしばなし かちかちやま ISBN 4-00-116362-4 | 2004年7月15日 | (株)岩崎書店 | 長谷川摂子 (1944年・島根県) | ささめやゆき (1943年・東京都) |
| ⑤ | ワンダー民話館 かちかちやま ISBN 4-418-05834-6 | 2005年11月1日 | (株)世界文化社 | 水谷章三 (1934年・北海道) | 村上勉 (1943年・兵庫県) |
| ⑥ | 日本名作おはなし絵本 かちかちやま ISBN 978-4-09-726871-0 | 2009年4月6日 | (株)小学館 | 千葉幹夫 (1944年・宮城県) | 井上洋介 (1931年・東京都) |
| ⑦ | CDえほん まんが日本昔ばなし かちかち山 ISBN 978-4-06-215752-0 | 2009年10月13日 | (株)講談社 | (編者)川内彩友美 | |
| ⑧ | 日本むかしばなし かちかちやま ISBN 978-4-323-03723-3 | 2010年5月 | (株)金の星社 | いもとようこ (1944年・兵庫県) | 同左 |
| ⑨ | いまむかしえほん5 かちかち山 ISBN 978-4-265-08005-2 | 2010年6月30日 | (株)岩崎書店 | 広松由希子 (1963年・ロサンゼルス) | あべ弘士 (1948年・北海道) |
| ⑩ | 日本の昔話えほん7 かちかちやま ISBN 978-4-251-01157-2 | 2010年10月20日 | (株)あかね書房 | 山下明生 (1937年・東京都) | 小山友子 (1973年・広島県) |

(2) 昔話の特徴

結果は、表3に示したとおりである。

発端句は9冊の本に書かれており、それぞれに特徴的な言い回しで、同じものは二つとない。口承文芸に始まる昔話ならではの結果と思われる、10冊ともに特徴的な言葉で子どもたちを「かちかちやま」の世界へ誘っていく様子がわかる。

それに対し、特徴ある結末句を記載しているのは、5冊である。東北や北陸地方で使われる結末句⁵⁾が多い。「おしまい」と現代風に終わっているものが2冊、特に明確な結末句といえる語句がないものは3冊である。その3冊は、No.①日本一ノ画噺は「とうとうとろけてづ

クブクブク。たぬきもーしょにブクブクブク」、No.②「ありがとう、ありがとう、となんどもおれいをいいました。」、No.⑧「じいさまは、かたきをとりました」で終わっている。繰り返しの音やリズムは、10冊ともそれぞれの表現でユニークに表現されている。

(3) 再話の内容

ここでは、場面ごとに表現されている文章を表4のように比較してみる。

場面1として、お婆さんが杵で撃ち殺される場面を取り出したところ、「ころされた」と行為の直接的表現型の絵本は、No.①、③、④、⑥の4冊であった。「しに

表2 昔話絵本「かちかちやま」の形態・構成の特徴（発行年順）

| 絵本 No. | 表記 | ページ数 (本文) | 文字数 (1頁当文字数) | 使用言語 文体 | 解説 | 絵本の大きさ 縦×横 (cm) |
|--------|-----|-----------|--------------|----------|----------------------|-----------------|
| ① | 縦書き | 34頁 | 556字 (16字) | 旧仮名遣い 常体 | (なし) | 13×8 |
| ② | 縦書き | 44頁 | 2198字 (50字) | 共通語 敬体 | 武士田 忠 (日本民話の会会員) | 25.5×18.5 |
| ③ | 横書き | 32頁 | 2152字 (69字) | 共通語 敬体 | (なし) | 22×24.5 |
| ④ | 横書き | 36頁 | 2036字 (56字) | 方言 常体 | (なし) | 14.5×19 |
| ⑤ | 縦書き | 26頁 | 1504字 (58字) | 共通語 敬体 | (なし) | 21.5×14.5 |
| ⑥ | 縦書き | 28頁 | 2614字 (93字) | 共通語 敬体 | 松谷みよ子 (児童文学作家) | 26.5×21.5 |
| ⑦ | 縦書き | 20頁 | 2288字 (114字) | 共通語 敬体 | 川内彩友美 (まんが日本昔話企画制作者) | 23.5×19 |
| ⑧ | 縦書き | 31頁 | 1972字 (64字) | 共通語 敬体 | (なし) | 28.6×22.5 |
| ⑨ | 縦書き | 32頁 | 2252字 (70字) | 共通語 敬体 | (なし) | 28.5×21.5 |
| ⑩ | 横書き | 30頁 | 2505字 (84字) | 方言 常体 | 山下明生 (文) | 26.5×18.5 |

ました」という結果の直接的表現型の絵本は、No. ②、⑤、⑧、⑨の4冊であった。一方、No. ⑦は「たおれたままうごきません」、No. ⑩は「たぬきはおばあさんのあたまに、ガツときねをうちおろした」という表現で、その先どうなったのかについては読者の想像に任せられている。

場面2として、ばあ汁と骨の表現を取り出してみたところ、10冊中5冊 (No. ②、⑤、⑥、⑦、⑧) は、絵も含めて表現されていなかった。あとの5冊 (No. ①、③、④、⑨、⑩) には表現されている。そのうち、ばあ汁と骨を両方表現しているのは、3冊 (No. ④、⑨、⑩) であった。また、誰が食べたのかについての表記は、①はお爺さんが食べた、③はお爺さんは知らずに、狸と一緒に食べた、④は狸は食べたとわかるが、お爺さんは食べていないと思われる、⑨はお爺さんが食べた、⑩はお爺さんは食べておらず、狸が食べたかどうかかわからないとなっている。④と⑩は、読者に想像を任せた文章、読者判断に委ねた表現であった。

場面3として、結末句の前の文章表現を取り出してみた。「ぶくぶくしずんでしまいました」のように、狸が沈

んでしまう表現で終わっているものは、5冊 (No. ①、③、④、⑤、⑨) あり、続く結末句で話が終わっている。その他は、②「なんどもなんどもおれいをいいました」、⑥「おじいさん、もうなくな。おばあさんのかたきをうちましたよーっ」、⑦「うさぎは、ばあさまをころしたたぬきを、どうしてもゆるすことができなかつたのです」、⑧「じいさま、かたきはとりました」、⑩「いいきみじゃ。おばあさんのかたき、おもしろい! そういいながらあみをひきあげ、あともみないでかえっていったそうな」というように、仇討を成し遂げたことの宣言、それに対する感謝の言葉、勧善懲悪を示した内容など、教訓的表現で終わっている。そのうち、⑧には結末句がなくそのまま終わっている。

(4) 描画表現

ここでは、登場する人物の回数、狸と兎の描画の仕方、日本古来の口承の中で現代人が珍しいと思われる語句表現、そして日本の家屋や田園風景の描画について比較してみた。表5がその一覧である。

描画技法は10冊それぞれに、技法の特徴を活かし

表3 昔話絵本「かちかちやま」の昔話の特徴（発行年順）

| 絵本 No | 発端句 | 繰り返し表現例 | 結末句 |
|-------|---|---|--------------------------------|
| ① | (なし) | カチカチ ビリビリ ノコノコ ギッチラコ ドンプラコ ブクブク | (なし) |
| ② | むかしむかしのこと、あるところに、おじいさんとおばあさんがくらしていました。 | かちかち ほうほう べたべた | 「ありがとう、ありがとう。」と、なんどもおれいをいいました。 |
| ③ | むかし、あるところに、じいさまとばあさまが すんでいました。 | 「ひとつぶのまめ せんつぶになあれ」 「じいのまめ かたわれになあれ」 かちかち ほうほう 「きのふね ほんこらしよ」「つちぶね さっくらしよ」 | どんとはらい。 |
| ④ | とんとん むかし あったとき。じいさまとばあさまが おったとき。 | ほっくらほっくら はたけをたがやし 「ひとつぶはせんつぶになあれ ふたつぶはまんつぶになあれ」 とんつくとんつく こなをつく しばをかつちゃあ ほうりほうり かちかち ほうほう | はなしは おしまい どんとはれ |
| ⑤ | とんとむかし。あるところに、じいさまとばあさまが すんでいました | ひとつぶは せんつぶに なあれ ふたつぶは まんつぶに なあれ かちかち ほうほう そおれ、こぎだせ こぎだせ。 すぎの きぶねは すーいすい。 どろの ふねは ぶっくらしよい | おしまい ちんころりん |
| ⑥ | むかしむかし、あったんだって。あるところに、おじいさんとおばあさんが、なかよく くらしていました。 | 「はんぶんのまめは、一つぶになあれ。」 「一つぶのまめは、千つぶになあれ」 かちかち もんもん | こんで いちごさーかえた |
| ⑦ | むかしむかし、あるところに、それはそれは気のいいじいさまとばあさまがすんでおりましたそうな。 | かちかち ほうほう ぶくぶく | おしまい。 |
| ⑧ | むかしあるところに、はたらきもののおじいさんと、やさしいおばあさんがすんでいました。 | ♪ひとつぶはせんつぶになあれ ふたつぶはまんつぶになあれ♪ カチカチカチカチ! ♪きのふねほっかりうかび すーいすい どろふねどろどろしずみ ぶーくぶく……?♪ | (なし) |
| ⑨ | いまはむかし。あるところに、おじいさんとおばあさんが なかよく くらしておりました。 | 「いひとつぶのまめ、せんつぶになーれ、せんつぶのまめ、まんつぶになーれ」 すつとんすつとん どっすんどっすん かちかち ほうほう 「木のふねざんぶりこ どろふねざっくりこ」 ぶくぶく | -おしまい。 |
| ⑩ | なんぼか むかしの はなしじゃが。 | かちかち ほうほう ほかほか めりめり あぶあぶ | なんぼか むかしの はなしじゃそうな。 |

*紙面の都合上、全書、分かち書きは反映していないこと、本書漢字にはルビ表記されていることをおことわりさせていただきます。

表4 昔話絵本「かちかちやま」の再話内容（発行年順）

| 絵本 No. | 場面1 (お婆さんが杵で撃ち殺される場面) | 場面2 (ばあ汁、骨の表記) | 場面3 (結末句の前文表現) |
|--------|--|--|---|
| ① | うまいうちに うかうかのり、たぬきのなはをいたらば、むぎはつかれずお婆あさん、きねでとうとうころされた | たぬきのおきゅうじ ばばあじる、ちいさんしらずに「うまいうまい」 | ふかみへくと だろぶねは、とうとうろけて ブクブクブク。たぬきも一しよにブクブクブク。 |
| ② | 体がじゆうになったとたん、たぬきは、きねをつかむと、いきなり、お婆あさんになぐりかかりました。「こりゃ、なにをする」お婆あさんは、さげびながら、にげまわりました。しかし、たぬきはみがるにお婆あさんにおいて、きねを力いっぱいふりおろしたのです。お婆あさんは、しりました。 | (記載なし) | 「おじいさん、お婆あさんのかたきは、うちましたよ。」そういうと、おじいさんも大よこびです。うさぎの頭をなでながら、「ありがとう、ありがとう。」と、なんともおれいをいいました。 |
| ③ | たぬきは、ばあさまといっしょにもちをつきながら、わざとあわをこぼしました。そして、ばあさまがひろおうとかがんだすきに、きねをふりあげ、ばあさまをうちころしてしまいました。たぬきはばあさまのきものをきて、ばあさまにばけました。 | 「ばあさまや。このたぬきじる、なんだかばあさまさいなあ」といきました。ところが、ばあさまにばけたたぬきが、「じいさま。たぬきはふるくなると、ばあさまさくなるもんだよ」というので、じいさまはたぬきといっしょに、たぬきじるをすっかりたべてしまいました。 | うさぎとたぬきが、ちょうしをあわせてふなべりをたたいているうちに、たぬきのつちのふねはずれて、たぬきもろともしんでしまいましたとき。 |
| ④ | ばあさまがなわを ゆるめてやると、たぬきはするするっとおりてきて—いきなりばあさまをきねでぶったたいてころしてしました。 | じいさまがやまからかえってくると、たぬきがとびだして、「ばばじるくった うめかったながしのした みろ ほねがあるばばじるくった うめかった」といって、ぼっぼこぼっぼこやまおくに にげっていった。 | すると だろのふねはぞわぞわ一つとくずれて、たぬきもいっしょにふかいふかいかわのそこにしずんでしまったとき。 |
| ⑤ | そのとたん、たぬきはいきなりばあさまにきねをたたきつけて、にげてしまいました。じいさまがやまからもどってみると、ばあさまはしんでいました。「おお おお、ばあさまがかわいそうじゃ」じいさまはこえをあげてなきました。 | (記載なし) | たぬきはついついちょうしにのって、ふなばたをぼこぼこたたいたからたまりません。だろぶねはくずれて、たぬきといっしょにぶくぶくしずんでしまいましたとき。 |
| ⑥ | たぬきはこめをつきながら、じっとお婆あさんのようすをうかがっていました。そして、お婆あさんがらすをのぞきこんだとき、あたまをおもいきりなぐって、ころしてしましたのです。はたけからもどったおじいさんは、かわりはたお婆あさんを見て、大ごえあげてなきました。 | (記載なし) | うさぎはいそいでふねをきしにもどすと、おじいさんのところにはまりました。「おじいさん、もうくな。お婆あさんのかたきをうちましたよーっ。」 |
| ⑦ | 気のいいばあさまは、たぬきのなわをほといてやりました。そしてきねをさしたして、「ほれ、てつだえ」というと、たぬきは、「さて、なにをつこうかの。」「こなじゃないのかえ?」「ばあさまをつくんじゃい。」「あああ—。」(中略)ばあさまは土間にたおれたままうごきません。 | (記載なし) | うさぎは、ばあさまをころしたたぬきを、どうしてもゆるすことができなかったのです。 |
| ⑧ | たぬきはすばやくなわからぬけでると、きねでお婆あさんのあたまをおもいきりたたいて、にげてしまいました。お婆あさんは ぼったりとたおれました。おじいさんがうちにかえってみると、お婆あさんがしんでいました。 | (記載なし) | たぬきのだろぶねは、どんどんみずをすいこんでいきます。そして、あつというまに、ぶくぶくとかわのなかへしずんでいきました。「じいさま、かたきはとりました」 |
| ⑨ | ちらばったこめをひろおうと、お婆あさんが かがんだところで、ござんっ! あたまをひとうち。お婆あさんは、ころっとしんでしまいました。 | 「ばあさんや、いまかえったよ。たぬきじるはできたかい」「はいはい。たんとおあがり」(中略)そして、おじいさんがずっとするまでのみはずと、お婆あさんは、みるみるたぬきのかおになり、「ばばじるくった。うまかった。ながしのしたのほねをみろ」 | 土のふねは、ざつりまぶたつ。たぬきは、川におこちて、ぶくぶくおぼれてしまいましたとき。 |
| ⑩ | 「はんごろしより みなごろし! たぬきじるより ばああじる!」そういうなり、たぬきはお婆あさんのあたまに、ガツンときねをうちおろした。【脚注*】 | おじいさんがばぶと、うらぐちからぶきみなこえがかえってきた。「ながしの下にほねがある!ながしの下のほねを見ろ!」 | 「いいきみじゃ。お婆あさんのかたき、おもしろい!」そういうながらあみをひきあげ、あとも見ないでかえっていったそう。 |

*はんごろしとは、もち米を半分だけつぶすこと、みなごろしとは、全部もち米をつぶすこと(本文より)

表5 昔話絵本「かちかちやま」の描画表現（発行年順）

| 絵本 No. | タイトル | 描画方法 | 野山園風景 | 農家 家の中 | おじさん 登場回数 | おばあさん 登場回数 | おばあさんの最後の姿 | | たぬき | | うさぎ | | まねとす | まねとす | ついて いるもの | かや | 火打石 | 漆/漆 | 木の種類 | その他 |
|-----------|---|---------------|-------------|----------------------|---------------|---------------|----------------------------|----------|---------------|--------|-------------|-------------|------|------|-------------|------------------|-----|--------------|------|-----|
| | | | | | | | 前 半 | 後 半 | 前 半 | 後 半 | 前 半 | 後 半 | | | | | | | | |
| ① | 日本一ノ画断 カチカチヤマ | 影絵 | なし | 開軒裏・新・お膳 | 6 | 2 | 言葉表現のみ | 6 着衣姿 | 7 着衣 | 0 | 9 着衣姿 | 脱穀臼 竪杵 | 石と金 | 不明 | 石と金 | どがらしみそ | 木 | | | |
| ② | 新講談社の絵本 かちから山 ISBN 406-1482548 (売) | 写真画 | 有り 四季の植物 | 農具・開軒裏・ 新装・竪・釜土土間 | 7 (最終登場有り) | 5 | 逃げた姿 | 7 動物 | 10 着衣 姿 | 0 | 13 着衣姿 | 脱穀臼 竪杵 | 石と金 | 柴 | 石と金 | どがらしみそ | 松 | お黒の おばあさん | | |
| ③ | 日本製作絵本シリーズ かちからやま ISBN 4834047693 | 大和絵 水墨画 | 有り | 開軒裏 | 3 | 2 | こぼれた粟を拾う姿 | 4 動物 | 10 動物 | 0 | 11 着衣姿 | 脱穀臼 竪杵 | 石と金 | かや | 石と金 | どがらしの美 のすすりつし | 松 | | | |
| ④ | てのむらむらしばなし かちからやま ISBN 400-1163624 | 創作水彩画 | 畑・山 | なし | 6 | 3 | 顔面蒼白で倒れた姿 | 6 動物 | 9 動物 | 0 | 10 着衣姿 | 創作水彩画 竪杵 | 石と金 | 柴 | 石と金 | たてみそ | 杉 | | | |
| ⑤ | ワンダー長話館 かちからやま ISBN 4418468346 | 創作水彩画 黒縁取 | 畑 | いろり・農具・薪・ 農作物・釜土 | 4 | 4 | 杵で打たれた姿 亡くなって寝かせられた姿 | 4 動物 | 13 動物 | 0 | 8 動物 | 脱穀臼 竪杵 | 石と金 | 焚き木 | 石と石 | どがらしみそ | 杉 | | | |
| ⑥ | 日本名作おはなし絵本 かちからやま ISBN 978-409-728710 | 創作水彩画 ほかし絵 | 有り | 井戸・竪土氏家・ いろり・釜土 | 5 (最終登場有り) | 4 | 杵で打たれた姿とする 直前の姿 | 4 着衣姿 | 8 着衣 姿 | 0 | 8 着衣姿 | 臼 横杵 | 石と金 | かや | 石と金 | どがらしみそ | 松 | | | |
| ⑦ | CDおはなし まんが本音おはなし かちから山 ISBN 978-406-2157320 | アニメ画 | なし | 縁脚・釜土・薪・瓶 | 5 | 4 | おいさんに抱えられた姿 (顔は見えていない) | 6 動物 | 14 動物 | 1 | 9 動物 | 脱穀臼 竪杵 | 石と金 | 焚き木 | 石と金 | どがらしみそ | 木の板 | | | |
| ⑧ | 日本おはなしばなし かちからやま ISBN 978-4-323-97283 | 創作現代水彩画 | なし | なし | 3 | 2 | うつ伏せて倒れている姿に おいさんが鞭をかぶる | 5 動物 | 11 動物 | 0 | 10 動物 | 創作現代 水彩画 | 石と石 | かや | 石と石 | どがらし | 杉 | | | |
| ⑨ | いまむかしおはなし かちから山 ISBN 978-4-263-68005-2 | 木版画 | 有り | なし | 7 | 3 | 頭部を打たれている姿 釜土の顔に骨 | 9 動物 | 12 動物 | 0 | 13 動物 | 木版画 | 不明 | かや | 不明 | たての汁 | 松 | | | |
| ⑩ | 日本の昔話おはなし7 かちからやま ISBN 978-4-251-01157-2 | 色版画 | なし 表紙に山 | なし | 3 | 3 | 臼を覗き込み、杵が 振下ろされる直前の姿 | 6 動物 | 11 動物 | 0 | 11 スカート姿 | 色版画 | 石と金 | 柴 | 石と金 | どがらし | 木 | | | |

た描き方で、読者の楽しみを誘うものと思われる。①の影絵技法は、形だけで表現されているので読者それぞれが、その詳細かつ具体的な表情や動きを思い描くことができる。幅をもたせたイメージを描く自由がある。水墨画やぼかし絵なども、日本の原風景を感じさせるものである。日本家屋の中に置かれている事物の描き方も様々である。②の尾竹國観は、日本画の名手といわれ、古き時代の描き方が現代においては、新鮮なものに目に映る。前半の物語に登場する、お爺さん、お婆さんの回数は、絵本によりまちまちである。登場回数が多いものは、それだけお爺さんとお婆さんのやりとりを詳細に表現していることがわかる。お爺さんが最終場面に再登場するのはNo. ②、⑥にある。

お婆さんが倒れた最後の姿の表現は、絵はなく言葉だけで表現しているものは、No. ①、逃げる姿や倒れる直前のかがんだ姿として表現されているものは、No. ②、③、⑥、⑨、⑩の5冊あり、亡くなった姿として倒れた姿がNo. ④、⑤、⑦、⑧、の4冊である。そのうち、お婆さんの顔が蒼白に表現されているものNo. ④、倒れているがお婆さんの顔は見えていないものはNo. ⑦、⑧、あとは寝かせられている姿No. ⑤である。お婆さんの骨が描かれているものは、No. ⑨の1冊であった。

狸と兎の描かれ方は、動物として描かれているもの、衣服を着て擬人化されているものがある。また、話の前半と後半で異なっているものもある。狸は、前半後半とも同じ動物姿で描かれているものは7冊（No. ③、④、⑤、⑦、⑧、⑨、⑩）、前半後半とも同じ着衣姿で描かれているものは2冊（No. ①、⑥）であり、前半が動物、後半が擬人化されているものが1冊（No. ②）であった。兎の場合は、10冊中9冊までが後半にしか登場していない。多くが着衣姿で描かれており、6冊（No. ①、②、③、④、⑥、⑩）ある。動物としての兎の姿は4冊（No. ⑤、⑦、⑧、⑨）であった。

「きね」と「うす」は、正確には二種類ある。餅をつく臼と、脱穀用の臼である。脱穀用は餅つき用よりも深く、ついた穀類が外に飛び出さないようになっている。脱穀用に使われるのが堅杵、餅つき用が横杵といわれる¹⁹⁾。脱穀用として描かれているのが6冊（No. ①、②、③、④、⑤、⑦）、餅つき用として描かれているのが4冊（No. ⑥、⑧、⑨、⑩）であった。ついているものも、麦、粟、粉、粳、米、ぼた餅とさまざまである。

次に、兎と狸の仇討場面に出てくるものについて、「かや」「火打石」「塗り薬」の種類、「木船」の種類で

比較した。燃やされる素材は、柴、焚き木、かやと3種類出てきている。火打石は、火打石と火打金の2つで1組が正式なものである。着火するためには鉄片を石に打ち付けて火花を飛ばすという²⁰⁾。その意味で、火打石と火打金で表現されているものは7冊（No. ①、②、③、④、⑥、⑦、⑩）、石と石で描かれているものは2冊（No. ⑤、⑧）。⑨については描かれ方が不明瞭で、判断つかない。木船に使われる木の種類は、松が4冊（No. ②、③、⑥、⑨）、杉が3冊（No. ④、⑤、⑧）であり、残りは、木の板としての表現（No. ①、⑦、⑩）であった。

その他の表現で特徴的にあげられるのが、No. ②に描かれるお婆さんである。歯を黒くそめている。お歯黒は、古くは上流婦人の間に起こったそうだが、室町時代に女子9歳のころに成年の印として使われ、江戸時代には結婚した婦人はお歯黒にしていたという²¹⁾。このことから、語られる時代によって、お婆さんの状態を読者は推測することができるのである。

5. まとめ

本稿では、口承文芸であった昔話が絵本化されていく過程を、昔話と絵本の本質に触れながら、歴史的経緯と具体的に表現されている再話の内容と描画方法について「かちかちやま」を通して検証してきた。以下をまとめとしておく。

昔話は、作者も語られている時代も場所も不詳であるが、話の筋は古来より受け継がれてきている。口承という性質上、地域により独特の言い回しや少し異なる話の展開があるのも魅力である。語り手が再話者として、聴き入る対象者との関係の中で、時に省略したり、わかりやすい表現に変えたりして柔軟に語ることも可能なのである。

保育者と子どもの関係であれば、保育者は、間近で子どもたちの表情や心情を受け止めながら、語っていくことができる。昔話に限らず、おはなしを語り聞かせることの重要性は、この関係性から生まれる意識や感情にあるといわれる²²⁾。

その意味で、絵本を介した昔話の伝達はさまざまな役割と効果があると考えられる。単に、教訓ものとして教育的に昔話を取り上げるのではなく、喜怒哀楽を含めた人間世界の営み、自然との共存など俯瞰的なとらえ方をして伝える必要があると考える。単に、喜びだけをもたらす話だけでは、本当の残酷性について鈍感になっ

てしまうだろう。

本稿では、「かちかちやま」を通して、昔話の描かれ方の現実を検証してきたが、作り手の意図を考察するまでには至っていない。他の昔話絵本をとり上げることも含めて、今後の課題としていきたい。

おわりに

近年、パソコンやスマートフォンなどの機器を通して、インターネットから手軽に映像を入手し、昔話を視聴することもできるようになった。これからの時代「幼少期に昔話を聞いて育った」というより「昔話を見て育った」という言い方をする人が増える時代になっていくのかもしれない。

「昔話は、日本人にとって、かけがえのない重要な文化財である」と小澤（2009）は繰り返し語っている²³⁾。文化の担い手として次の世代にそれを伝える重要な役割を果たすのは、保育者である。保育者は、今や文化の重要な伝承者なのである。子ども時代にその多くの時間をともに過ごす保育者だからこそ、その役割はこれからさらに大きくなると考える。

【注釈】

注1) 昔話の残酷性については、小澤俊夫（2005）、瀬田貞二（2009）、藤本朝巳（2010）がそれぞれの著書の中で述べている。筆者は、自然と人間の共存という彼らの大局的なたらえ方に共感する立場をとり、本研究においては、残酷性や教育的意義について追及するものでもないことを最初に明示しておきたい。

注2) 一般書店で手に入れやすい絵本を筆者の任意で選定した。なお、①を除くすべての出版社には研究の趣旨を伝え、著作権法第32条を遵守し、著作物の転載許可をいただいている。

【引用文献】

- 1) 小山祥子（2012）乳幼児の言葉の育ちに関する現状と課題（2）一家庭と保育の場における「おはなし」の環境から— 駒沢女子短期大学研究紀要第45号 31-38
- 2) 同上
- 3) 三宅興子他（1997）日本における子ども絵本成立史—「こどものとも」が果たした役割— ミネルヴァ書房 1

- 4) 前掲書 1)
- 5) 稲田浩二 稲田和子（2010）日本昔話ハンドブック新版 51-53
「めでたしめでたし」「どっとはらい」「とっちばれ」「いちごさかえた」「しゃみしゃつきり」「むかしこっぷり」他、地方ごとに異なる言い方がある。
- 6) 藤本朝巳（2002）子どもに伝えたい昔話と絵本 13
- 7) マックス・リューティ著 野村滋訳（1996）昔話の本質と解釈 福音館書店
- 8) 小澤俊夫（2009）改訂昔話とは何か 小澤昔話研究所 50-59
- 9) 鳥越信編 日本の絵本史Ⅲ（2003）ミネルヴァ書房 380
- 10) 同上 380-381 Barbara Bader “American Picture books”（1976）
- 11) 関敬吾著 小澤俊夫補訂（2013）日本昔話の型 三角商事
- 12) 稲田浩二 稲田和子（1980）日本昔話百選 三省堂 68
- 13) 小澤俊夫（2005）昔話が語る子どもの姿 古今社 93-113
- 14) 鳥越信（2001）はじめて学ぶ日本の絵本史I ミネルヴァ書房 27-29
- 15) 同上 35-36
- 16) 同上 43-44
- 17) 前掲書 3) 3-5
- 18) 武者小路実篤（1915）かちかち山と花咲爺 阿蘭陀書房 3-4
- 19) 千葉幹夫 文・構成（2002）新講談社の絵本 かちかち山 講談社 武士田忠「かちかち山」解説
- 20) 同上
- 21) 広辞苑第5版 岩波書店
- 22) 小澤俊夫（1998）昔話が語る子どもの姿 古今社 28-29
- 23) 同上 40

【謝辞】

各絵本出版社より、研究目的のための絵本使用を許可いただいたことに感謝申し上げます。